

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	川北雅子
2. 審査委員	主査：（鳴門教育大学教授） 長島 真人 副主査：（岡山大学教授） 虫明眞砂子 委員：（岡山大学教授） 小川 容子 委員：（岡山大学教授） 上田 久利 委員：（鳴門教育大学教授） 村井万里子
3. 論文題目	学校音楽教育における阿波人形浄瑠璃の教育的価値と教材としての可能性に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 川北雅子から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成27年7月19日（日） 13時00分～14時00分 場所：大阪サテライト 402セミナー室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>【論文の構成】</p> <p>序章 第Ⅰ部 郷土芸能の文化的価値と教育的価値に関する原理的考察 第一章 文化と人間形成に関する諸論 第二章 音楽科教育において教育的価値として扱われる伝統音楽の本質と意義 第三章 音楽科の教材となる地域の人形芝居の基本的特質 第Ⅱ部 阿波人形浄瑠璃の教育的価値に関する分析的考察 第四章 阿波人形浄瑠璃の特質 第五章 阿波人形浄瑠璃の教育的価値 第六章 教材となる《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉の特性 第Ⅲ部 《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉の教材としての可能性に関する実践的考察 第七章 体験の場を組み込んだ実践とその考察 第八章 太夫の語りを直接鑑賞させた実践とその考察 第九章 表現と鑑賞の関連を重視した実践とその考察</p> <p>終章 基本文献一覧 補足資料</p>

【論文の概要】

本研究は、徳島県の伝統文化である阿波人形浄瑠璃の文化的価値と教育的価値に着目し、中学校の音楽授業場面での教材としての可能性を明らかにした序章、終章のほか、3部全9章の論考である（本文注全242ページ）。

研究方法は、文献調査による論理的研究を基礎とし、第Ⅰ部では郷土芸能の文化的価値と教育的価値に関する原理的研究を行い、第Ⅱ部では教材となる阿波人形浄瑠璃《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉の分析的研究を行い、第Ⅲ部では実践を通して明らかにされた学習者の記録から教材としての可能性を究明した実践的研究を行っている。

第Ⅰ部は、基礎的な研究として、第1章で文化と人間形成に関わる諸論を、特に、シュプランガーの文化と教育に関する論考に注目しながら検討した。その結果、文化には、客観化された精神、共通精神、規範的精神という三つの精神が内在し、人間は、この三つの精神を探究することによって、自己の精神的な財産を拡大し、共同体の中での絆を深め、社会の一員になっていく上で必要とされる倫理観や価値観を育てていくこと、そして、このような文化による人間形成の営みが実現されると、人間は、自己の内面に再構築された文化を次の世代に伝えていこうとすること、したがって、文化の伝達と再創造は人間形成の営みと表裏一体の関係であることを明らかにした。第2章では、音楽科教育の営みが、このような文化として存在する音楽を媒介として、子どもの内面を豊かにしていく営みであることを確認し、文化の一つとして存在する伝統音楽の文化的価値と教育的価値について論考した。そして、第3章では、地域の人形芝居の特質と教育的価値について論考した。その結果、地域の人形芝居は、祭礼時の奉納芸として、地域の人々によって演じられ、この奉納芸を鑑賞する地域の人々は簡素や滑稽、陽性、悲哀という人間感情の様態にふれ、自己の内面を豊かにし、地域の共同体としての絆を深め、倫理観や価値観を育てていることが明らかにされた。

第Ⅱ部は、第Ⅰ部の基礎的な考察をふまえながら、阿波人形浄瑠璃の教育的価値に関して、分析的な考察を行った。第四章では、阿波人形浄瑠璃の文化的な価値についての吟味がなされた。阿波人形浄瑠璃は、農村地域で祭礼時の奉納芸として演じられ、この奉納芸を鑑賞する人々は、作品の中にみられる悲哀という人間感情に触れることによって、自己の内面を豊かにし、地域共同体の絆を深め、倫理観や価値観の豊かにしていることを明らかにした。第五章では、大正期に徳島県では阿波人形浄瑠璃が県民生活に深い影響を及ぼしていたために、当時の徳島県教育會が阿波人形浄瑠璃の中で扱われている義太夫の調査を行ったという歴史的事実に着目し、その社会教育的な価値が吟味された経緯を検討した。その結果、当時の徳島県教育會が「忠」と「孝」の規範を扱う作品には社会的教育的に価値があることを明らかにし、その他の作品は、判断力が未熟な青年子女には不適切であるという見解を持っていたことを明らかにした。つまり、阿波人形浄瑠璃には、当時の教育関係者の見地からは、教育的価値があるものとそうでないものとが存在していたことが明らかにされた。したがって、この考察から、音楽科教育では、子どもたちの内面を豊かにしていくという観点から教材となる作品を選択する必要があることが確認された。第六章では、阿波人形浄瑠璃《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉を中学校の音楽科の教材として吟味し、この作品が中学生にとって、簡潔で具体的であり、典型的な特徴がみられることを明らかにした。特に、ここでは、音楽的な仕組みとこれによって象徴されている悲哀と親子の情愛に着目し、分析的にそれらの特徴を明らかにした。

第Ⅲ部では、第七章から第九章まで、阿波人形浄瑠璃《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉を教材として授業を構想し、実践し、授業の成果として明らかにされた生徒の学習の記録を分析的、反省的に検討し、ここから再度授業を構想し、実践し、分析的、反省的に検討するという実践的な考察を三度試み、最終的に、作品の中にみられる「引き寄せて」や「ふり返り」という「地（地合）」の産字の部分の太夫の声の音色に注意を促し、母お弓の人間感情の様態を詳細に把握できるように支援することによって、生徒たちはこの作品の中にみられる悲哀と親子の情愛に触れ、作品を深く味わい、その価値を認識し、このような伝統文化の継承に関与しようとする態度を育成する可能性が高まることを明らかにした。

2. 審査の経過

(1) 論文構成について

本研究は、地域の伝統文化として存在している阿波人形浄瑠璃を、人間形成を促す教材としてとらえ直し、その本質的な特性を明らかにするために、第Ⅰ部では、文化と人間形成に関する諸論を検討し、ここで明らかにされた論理に基づいて、地域の人形芝居に内在する教育的価値を明らかにした。また、第Ⅱ部では、阿波人形浄瑠璃の教育的価値を論理的、分析的に検討した。そして、第Ⅲ部では、《傾城阿波の鳴門》〈順礼歌の段〉が教材として有効に活用されるために、授業の構想と実践、省察、再構想というサイクルを三度試み、教材としての可能性を高めるために留意すべき点を明らかにした。論旨は、第Ⅰ部で明らかにされた論理に基づいて展開され、論理的なものになっている。

(2) 論文の独創性について

地域の伝統文化として存在する阿波人形浄瑠璃を中学生の人間形成を促す教材としてとらえ直し、その本質的な特性と実践における可能性を追求した研究であるが、まず、シュプラランガーが示唆する文化と教育に関する論考から、文化に内在する精神的価値を客観化された精神、共通精神、規範的精神という三つの層で把握し、この三つの層から日本の伝統音楽や地域の伝統芸能である阿波人形浄瑠璃に内在する精神的価値を明らかにすることによって、人間形成を促す音楽科の教材として扱われるべき本質的な側面を論理的に整理することができたことは、音楽科の教材論に関わる一つの基礎研究の枠組みを明らかにしたということによって独創性が認められる。また、人間形成の営みが実現されることによって、文化の伝達や再創造の可能性が保証されてくることを論理的に明らかにすることができたことは、地域の伝統文化の保護政策を検討していく上で意義がある。

(3) 論文の学校教育実践への貢献

日本の伝統音楽や地域の伝統文化を学校教育実践の場において教材として扱うことは、指導者にとっても、学習者にとっても非常に困難な状況にあるが、本研究は、このような問題状況を解決する道筋を示唆する可能性を明らかにしている。また、実践的な考察を通して、教材の可能性をより詳細にとらえ直し、注目させるべき視点を具体的に特定する探究方法を明らかにしたことは、今後の音楽科教育の実践的な考察を拡大していく上で意義がある。

(4) 論文の発展性

阿波人形浄瑠璃のような地域の伝統文化は、いずれに地域においても継承者の高齢化が進み、絶滅の危機に瀕している状況にある。本研究は、人間形成の営みと文化の伝達と再創造の営みが表裏一体の関係にあることを明らかにし、地域の伝統文化は、人間形成を促す音楽科の教材として、精緻な教材の吟味と実践的な考察を試みることによって、地域の伝統文化に対する学習者の価値認識を高め、地域の伝統文化を保護しようとする社会が創造されていく可能性が論理的に示唆されている。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、川北雅子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。